

まる た ただ お  
丸 田 忠 雄

学位の種類 博士(文学)  
学位記番号 文第160号  
学位授与年月日 平成12年4月20日  
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 使役動詞の意味論と統語現象

論文審査委員 (主査)

教授 中村 捷 教授 平野 日出征  
教授 金子 義明

## 論文内容の要旨

### 序章

1970年代の生成意味論で、語が統語上の原子要素ではなく、さらにより小さな単位に分解され、種々の統語現象がこの語彙分解から説明されるというアプローチが提案された。この立場は、1970-1980年代のCarter, Jackendoffらの一連の研究により、さらには、1980年代後半から、Pinker, B. Levin & Rappaport Hovavらの研究に引き継がれ、現在「語彙意味論 (Lexical Semantics)」、すなわち語の意味が句の統語的性質を決定するとする考え方として確立した。この枠組みでは、例えば、*kill* や *melt* などの語彙的使役動詞の意味は、[x CAUSE y TO BECOME <NOT-ALIVE>/<LIQUID>] のように表記されるが、このような複合的な意味構造から、John almost killed Bill. での almost の多義的な解釈や、*Floyd melted the glass and that surprised me.* での that の指示対象 (= 'the glass became liquid') が説明されてきた。また、この構造中の CAUSE は、中間態構文 (middles) や結果句 (resultatives) などの統語現象に、BECOME は in a month などの完了の時間表現の出没 (e.g., *John built a house in a month.*) などに関わっていることが知られている。

本研究では、語彙的使役動詞に関わる五つの統語現象——心理動詞にみられる T/SM 制限、使役起動交替、勧誘行為交替、描写句の分布、場所格交替——を取り上げ、語彙意味論の立場から考察を加える。語彙意味の捉え方には、意味役割のセットと語彙概念構造 (LCS) があるが、本稿は語彙概念構造を用いていく。また Pesetsky (1995) によれば、語彙意味の記述には、粗い意味論と精密意味論の二つがあるとされるが、本稿は、後者の精密意味論の立場をとる。

## 第1章 語彙的使役動詞

本稿は、Levin and Rappaort and Hovav (1995) に従い、語彙的使役動詞の意味は、一定の語彙意味鑄型に則って画定されるとし、とりあえず第2章との議論の関係で、以下の二つの鑄型を仮定する。

- (1) a. [ x ACT (ON y)] CAUSE [BECOME [ y STATE/AT-PLACE]]
- b. [ x ACT (ON y)] CAUSE [BE [y STATE/AT-PLACE]]

(1a)のLCSは、break, open, meltなどの起動動詞や move, carryなどの移動動詞などの語彙意味を記述する。(1b)のLCSは、frighten, angerなどの心理動詞や jail, setなどの意味を特徴づける (e.g., *The sheriff of Nottingham jailed Robin Hood.*)。

## 第2章 心理動詞にみられる T/SM 制限

Pesetsky (1987, 1990, 1995) で、以下の心理動詞文の非文性が問題とされてきた。

- (2) a. The article in the Times angered Bill (\*at the government) .
- b. The distant rumbling frightened Mary (\*of another tornado) .
- c. The television set worried John (\*about the veracity of Bill's alibi) .

Pesetsky の提唱する精密意味論では、anger, frighten, worryなどのEO動詞(experiencer-object verbs)は使役動詞とみなされ、[Causer, Causee, Target (of Emotion)] (e.g., anger, frighten), [Causer, Causee, Subject Matter (of Emotion)] (e.g., worry) という意味役割のセットで特徴づけられる語彙意味をもつとされている。例えば(2a)で、Billの怒りの対象は、新聞記事そのものではなく、新聞記事で取り上げられた政府の腐敗であるという解釈も可能である。この場合には、Billの怒りの原因(=The article in the Times)とは異なるBill怒りの対象(Target = the government)が、この文の解釈から裏付けられる。しかし、統語レベルでは、これらの役割を担う項のうち、Causer, Causeeのみが実現を許され、(2)のように、Target項やSubject Matter項までの3項同時の実現は許されない。Pesetskyは、EO動詞とTarget/Subject Matter(T/SM)項との不共起をT/SM制限として記述し、これを、独自のカスケード統語論と、EO動詞のゼロ形態素分析によって説明する。その詳細は割愛するが、主旨は、EO動詞に付加している使役のゼロ接辞 $\Phi_{CAUS}$ が、独立した動機づけをもつ統語的一般的原理からPP補部の生起を排除するとするものである。しかし一方で、PesetskyのT/SM制限には決定的な反例が存在する。

- (3) a. Sue's remarks aroused us to action.
- b. It provoked him to rage.
- c. The orientation lectures acclimatized us to our new surroundings.
- d. ?The passage of time accustomed the Berliners to their wall.

(Pesetsky (1995: 215f.) 自身による指摘)

- (4) a. The recession reminded me of the danger of speculative investment.
- b. His expression convinced me of her guilty.
- c. The employee familiarized the workmen with a new machine.
- d. This book first interested me in French literature.

これらでは、いずれも、ゼロ接辞分析を受ける使役動詞とPP補部((3)ではGoal、(4)ではTarget)が共起しているにも関わらず、適格な文と判断される。Pesetsky自身、これらの反例に適切な説明を見出せないでいる。

本稿では、T/SM 制限に対して語彙意味論の立場からアプローチする。まず本稿は、Pesetsky が EO 動詞に仮定する意味構造 [Causer, Causee, Target/Subject Matter] は誤りであると考ええる。使役動詞は、意味的に使役主と被使役者そして結果の 3 項をもつ。Frighten, surprise などの EO 動詞も、使役動詞の下位類をなすもので、必然的に一般的な使役動詞の意味鑄型に従うと仮定する。EO 動詞は、ある作因が被使役者に心的影響を及ぼし、特定の心的状態（結果）へと導くという意味を表す。結果状態が、心的であるという点を除けば、EO 動詞も、状態変化動詞一般と同じ意味型をもっている。本稿は、EO 動詞は(5)のような LCS をもつと仮定する (cf. Voorst (1992))。

(5) *anger*: [ x AFFECT y ] CAUSE [ BE [ y <<sub>STATE</sub>IN-ANGER > ] ]

この構造のどこにも Target 項を認可する意味成分はない —— 第 3 項は、定項 = <IN-ANGER> として語彙的に充足しており統語的に実現される必要はない —— ので、(2a) で T/SM 制限効果が生ずるのである。(2a) に Pesetsky があるとする「怒りの対象」は、語彙意味的なものというよりもむしろ、語用論的に説明されるべきものである。一方、(3a, b) の動詞については、結果項 (Goal) が変項なので、PP という形で統語的に実現される (3c, d)、(4) の動詞については、いずれも、ある対象を特定の心的方向に向けるという意味をもつ。つまりこれらは、方向付けの使役動詞 (e.g., *aim, point, direct, lever, etc.*) の下位類に属するもので、本稿は(6)の LCS をもつとする。

(6) *interest*: [ x ACT ON y ] CAUSE [ ORIENT [ y TOWARD-z ] ]

この LCS では、「方向」項（結果項のタイプ）は変項なので、(4) におけるように、PP 補部として義務的に統語的実現を受けるのである。

以上本章は、EO 動詞の語彙意味論から、Pesetsky の T/SM 制限が誤謬であることを論証した。

### 第 3 章 使役起動交替 (Causative/Inchoative Alternation) について

本章は、*break, open, melt* などの、一定の非対格動詞 (unaccusative verbs) にみられる(7)の使役起動交替を語彙意味論から説明しようとする。

- (7) a. The window broke./Pat broke the window.  
 b. The door opened./Antonia opened the door.  
 c. The snowman melted./The sun melted the snowman.

この交替に参加する使役動詞の意味構造は、対応する自動詞を cause の下に埋め込んだ 'x cause y to intransitive verb' と分析されるが、全ての自動詞がこの交替を受けるわけではない。例えば、*cry, laugh, speak* などの非能格動詞 (unergative verbs) や、非対格動詞でも発生動詞 (e.g., *happen, occur, etc.*)、出現動詞 (e.g., *appear, emerge, etc.*)、存在動詞 (e.g., *exist, live, etc.*)、方向概念をもつ地理的移動動詞 (e.g., *arrive, ascend, etc.*) などは使役交替に参加できない。本章では、使役交替に自動詞から他動詞への派生方向を仮定し（したがって、*kill* や *assassinate* などの語彙的使役動詞は、独立した資格をもっており、使役交替には関与できない）、使役交替に参加する自動詞の語彙意味から、そのメカニズムを解明する。

#### 3.1. 使役の二つのタイプ—INITIATE 型の使役動詞と CAUSE 型の使役動詞

語彙的使役動詞の意味構造は、従来 (8a) ないしは (8b) のように一様に CAUSE で捉えられてきた。

- (8) a.  $x$  CAUSE [ $y$  TO BE(COME)STATE/AT-PLACE]  
 b. [ $x$  ACT ON  $y$ ] CAUSE [ $y$  BE(COME) STATE/AT-PLACE]

一方本章では、Talmy (1985b) に従い、使役を オンセット使役と、同延使役 (extended causation) の二つのタイプに区分する。オンセット使役とは、ある不活性の行為体が、使役主から与えられた一撃により、以後自律的に独自のふるまいを実現していくものをいう。一方、同延使役とは、使役主の作用が絶えず被使役体に及び、被使役体側で実現される独立した出来事がないものをいう。例えば、*John rolled the ball.* (オンセット使役) において、回転に従事しているものはあくまで *the ball* で、*John* はボールを無理矢理手でいじり回しているのではない。*John* は、ボールの外側から、ボールにその回転運動の始動・継続のエネルギーを与えているにすぎないのである。この意味で、roll が表す出来事の実現に直接責任をもっているのは *the ball* 自体で、使役主自身は回転とは別のふるまいに従事している。本稿は、このような場合に典型的なオンセット使役が成立しているとする。逆に、*The avalanch destroyed several houses.* で、家屋側には、被る変化に何ら責任がない。雪崩の作用と家屋の破壊は時空間上同延で、家屋の破壊は完全に、使役主の作用に依存している。本稿は、このように、変化体側に自らの変化に当事者能力が全く欠けている場合に、同延使役が成立しているとする。

### 3.2. Initiator, Effector

本稿は、同延使役を CAUSE、オンセット使役を INITIATE で捉えることにする。

- (9) a. 同延使役: [ $x$  ACT ON  $y$ ] CAUSE [ $y$  ... ]  
 b. オンセット使役: [ $x$  ACT ON  $y$ ] INITIATE [ $y$  ... ] ([ $y$  ... ] は自立型の出来事)

オンセット使役では、[ $y$  ... ] の結果出来事は、 $y$  自体が画定する  $y$  独自の出来事と把握される。使役出来事の役割は、結果出来事の自立性を侵すことなく、その始動・展開を助けるものである。本稿は、 $x$  項の作用が  $y$  項による独立した出来事をアクティベートするという意味で、 $x$  項を Initiator と呼ぶことにする。また Initiator の作用により、活性化され自らの出来事を実現する主体を Effector (遂行体) と呼ぶことにする。例えば、(10)で、*the wind* が Initiator、*the ball* が Effector となる。

- (10) The wind rolled the ball down the hill.

本稿はさらに、このような INITIATE 構造が、動作主動詞にも存在すると仮定する。例えば、*Bill rolled down the hill.* で、rolling を直接実現しているものは *Bill* の肉体である。*Bill* の肉体の運動を始動したものは、*Bill* の意志である。本稿は、*Bill* の意志行為 (決定) と回転体としての *Bill* との間に INITIATE の関係があると考え (cf. Foley and Van Valin (1985))。この意志主体を Vol (itional)-Initiator と呼ぶことにする。これに対し、(10)の *the wind* を Ext (ernal)-Initiator として区別する。

### 2.4 使役起動交替の基本的パターン

本稿は、使役起動交替は Effector が関わる自動詞の LCS——自己達成的な出来事を表す——と、それに始動的な INITIATE 部が取り付けられた使役の意味構造の、二つの LCS により説明されると主張する。例えば、*open* にみられる交替をみてみよう。

- (11) a. The door opened. → b. The wind opened the door.

自動詞 *open* は、蝶番などのドアの内部構造によって規定されるドア特有の運動 と、not-open 状態から open 状態への変化を捉えている。ドア自体が独自の出来事を成立させているという意味で、ドアは Effector と捉えられる。事実、*open* には、*What the door did was open.* (Davidse

(1992))という疑似分裂文が可能である。Effector が関わる このような LCS に INITIATE 部が付加できるとしてみよう。

- (12) a. [ y TURN-ON-HINGE ] CAUSE [ BECOME [ y <OPEN> ] ]  
b. [[ x ACT ON y ] INITIATE [ y TURN-ON-HINGE ] ] CAUSE [ BECOME [ y <OPEN> ] ]

(12b) の LCS は、(x, y) の2項よりなる項構造に写像される。一方、(13)の使役動詞 *open* には、同じく *open* 状態への変化を伴ってはいるが、*the letter* により実現される独自の活動はない。

- (13) a. John opened the letter./ b. \*The letter opened.

手紙は通例破って開封される、使役主の同延的作用の一方的な対象で、Effector として独自の出来事を実現する媒体ではない。(13a) の *open* には、[ x ACT ON y ] CAUSE [ BECOME [ y <OPEN> ] ] という CAUSE 型の同延的使役関係が成立しており、INITIATE 部の付加（使役交替）により導かれた使役動詞ではない。

Effector を参与者とする典型的な自動詞には、*roll, bounce, spin, swing* などの特有の様態を伴う活動動詞があるが、本稿の予測通りこれらは使役交替に参加する。また、Levin and Rappaport Hovav (1995) がいう *hang* などの空間形態動詞も、Effector による一定のふるまい（特有の姿勢維持のふるまい）を表す。Talmy (1985) に従い、その LCS を表示すると、(14b)のようになる。

- (14) a. A portrait hung on the wall.  
b. *hang*: [ y HANG ] & [ BE [ y ON-z ] ]

(14b)で、[ y HANG ] に INITIATE 部を付加すると、[[ x ACT ON y ] INITIATE [ y HANG ] ] & [ BE [ y ON-z ] ] という LCS 及び項構造 (x, y, z) が導かれ、*They hung a portrait on the wall.* という使役文が導かれる。

### 3.5. 内的原因動詞 (internally caused verbs)

*Run* や *walk* などの非能格動詞も、Effector による典型的な活動を表すが、使役交替には参加できない。

- (15) a. Mary ran. → \*John ran Mary.  
b. Mary walked. → \*John walked Mary.

これらの動詞は通例意志主体による行為を表すもので、(16) の LCS をもつ。すなわち、Mary の意志が、身体としての Mary の運動を始動しているのである。

- (16) [ y DO AN ACT OF VOL ] INITIATE [ y RUN/WALK ]

ここで、y 項は、RUN/WALK で表される行為の Effector であると同時に、その行為を始動した意志主体、Vol-Initiator でもある。すなわち、*run, walk* などの活動動詞の LCS には、すでに意志行為の INITIATE 部が付加しており、本稿は、これが、これ以上の INITIATE 部の付加を許さないと仮定する(15)。

しかし、もし純粋に Effector (非意志的行為体) だけが関与する *run, walk* の用法 ([y RUN/WALK])があれば、これには INITIATE 部が付加できて使役用法が可能と予測される。このような例が *run* にみられる。

- (17) a. His car run off the road. → He ran his car off the road.  
b. The engine is running smoothly. → He is running the engine.

ここでの *his car, the engine* は、Effector 役だけを担い、Vol-Initiator 役は担っていない。また、*laugh* のような自発的な動詞も使役交替しない (e.g., \**The comedian laughed John.*) が、これも、感情的な反応という内的原因 (Initiator) と笑い手の *laughing* 行為とが切り離せない形で結合しており、これ以上の INITIATE 部を付加して使役化することはできないことによる。

### 3.6 発生・出現・存在動詞について

発生・出現・存在動詞には使役起動交替が不可能である。

- (18) a. *The accident happened.* → \**The motorist happened the accident.*  
 b. *A dove appeared from the magician's sleeve.* → \**The magician appeared a dove from his sleeve.*  
 c. *An explosion occurred.* → \**The gas leak occurred the explosion.*  
 d. *A solution to this problem exists.* → \**The famous mathematician existed a solution to the problem.*

本稿の使役交替の説明は、Effector による自己達成的なふるまいを表す自動詞的 LCS と、この LCS への始動的な外的作因 (INITIATE 部) の付加からえられる二つの LCS が交替効果を生み出すとするものであった。つまり、自動詞が使役用法をもつためには、その参加者が、外的作用に触発されて独自の出来事を展開していく必要がある。しかし、発生・出現・存在動詞については、意味内容が一般に薄く、参加者による独自の運動を表すとは考えられない。むしろこれらは、その参加者が被る変化のみを捉えた動詞で、(19) のように純粋に Theme 役のみを担い Effector 役は欠く、と考えられる。

(19) NP (Theme) *happen/appear/occur/exist.*

例えば (18b) は、ハトが自分の身体を実現媒体として登場した、というハトのふるまいを捉えているのではなく、何らかの理由でたまたまそれが 'visible' になったことを表している。このような非自立的な出来事を表す意味構造には INITIATE 部の付加は不可能で、(18) の結果に至る。同じ筋書きは、*go, come* などの往来発着動詞、*disappear* などの消滅動詞にも当てはまる (Levin and Rappaport Hovav (1995:147))。

(19) の意味に基づくオンセット使役の把握は不可能であるが、結果出来事の自立性を必要としない同延使役的把握は可能である。例えば、*appear* に基づく、[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y VISIBLE]] という意味構造は合法的である。しかし、ここには INITIATE 使役は関わっていないので、[BECOME [y VISIBLE]] を捉える名前 (= *appear*) を、この LCS 全体に用いることはできない。代わりに *take out* などの補充形が用いられることになる。

以上、同延使役とオンセット使役の区別により、使役起動交替の仕組みを明らかにした。

## 第4章 勧誘行為交替 (Induced Action Alternation)

前章で、Agent を主語とする非能格動詞は使役交替を受けないと論じたが、一定の非能格動詞に、勧誘行為交替と呼ばれる使役交替が可能である。

- (20) a. *The soldiers marched to the tents.* → *The general marched the soldiers to the tents.*  
 b. *The horse jumped over the fence.* → *The rider jumped the horse over the fence.*  
 c. *The mouse ran through the maze.* → *We ran the mouse through the maze.*

この交替は、(20) の移動様態を表す動作主動詞に典型的にみられ、(20) のように経路や着点を表す補部が必要とされる。さらに (20) のように、使役動詞について、動作主以外の使役主は排除され、

また使役方法も、操作的ではなく勧誘や威圧による遠隔使役である。したがって、このような使役を受け付けない「不服従な」被使役者は排除される(24)。

(21) canter, drive, fly, gallop, leap, march, race, run, swim, trot, walk, ...

(22) a. The soldiers marched. → ??The general marched the soldiers.

b. The horse jumped. → ?The rider jumped the horse.

c. The mouse ran. → \*We ran the mouse.

(23) a. \*The downpour marche dthe soldiers to the tents.

b. \*The firecracker jumped the horse over the fence.

(24) a. John jumped the horse /\*the ball/\*the goat over the fence.

b. John swam his dog/\*Mary across the river. (Bouchard (1995:195))

本稿の説明は、これらの交替が、Levin and Rappaport Hovav (1995) のように使役化によるのではなく、もともとの再帰的な意味構造に適用する脱再帰化 (dereflexivization) によりもたらされる、とするものである。この操作は、例えば典型的な再帰動詞 shave の意味構造 [ x SHAVE x ] (e.g., *John shaved (himself).*) に適用して、[ x SHAVE y ] という LCS を導き、( x, y ) という 2 項よりなる他動詞の項構造をもたらず (e.g., *The barber shaved the customer.*) ものである。

#### 4.2. 移動様態動作主動詞の再帰分析

池上 (1974) は、典型的な勧誘行為交替動詞である *march* の、特に経路表現が伴われた用法について、再帰的な分析を施している。

(25) They marched to the tents. (= They caused themselves to go to the camp by marching.)

ACT OF VOL レベルも含めてこの *march* の LCS を捉えると(26)のようになる。

(26) [[ x DO AN ACT OF VOL ] INITIATE [ x MARCH ]] CAUSE [ BECOME [ x TO-z ]]

[ x DO AN ACT OF VOL ] INITIATE [ x MARCH ] の部分の再帰関係に脱再帰化を適用すると(27)がえられる。

(27) [[ x DO AN ACT OF VOL ] INITIATE [ y MARCH ]] CAUSE [ BECOME [ y TO-z ]]

この LCS は、x 項の意志が y 項に MARCH させ (coercion)、その結果 y が z 位置に到達するという、(20a)の使役動詞文の意味を適切に捉えている。同様に walk (to ...) の LCS も (28) のように再帰的に表される (cf. Saksena (1980), Talmy (1985a), Broadwell (1988))。

(28) a. He walked to the car.

b. [[ x DO AN ACT OF VOL ] INITIATE [ x WALK ]] CAUSE [ BECOME [ x TO-z ]]

[ x DO AN ACT OF VOL ] INITIATE [ x WALK ] の再帰関係に脱再帰化が適用してえられた LCS (29a) が実現されたものが、(29b)である。

(29) a. [[ x DO AN ACT OF VOL ] INITIATE [ y WALK ]] CAUSE [ BECOME [ y TO-z ]]

b. The stableboy walked the horse round the enclosure.

さらに、(28b) には、使役出来事と結果出来事との間にも再帰関係が成立している。これに脱再帰化が適用すると (30a) の LCS が導かれ、これが実現されたものが (30b) である。

(30) a. [[ x DO AN ACT OF VOL ] INITIATE [ x WALK ]] CAUSE [ BECOME [ y TO-z ]]

b. He walked his bicycle up the hill.

ここでは、使役主が自分の意志で歩き、自分の身体ではなく、自転車を動かして坂の上に到達したという出来事を捉えている。この場合は、Effector (=歩き手) は相変わらず使役主で、

移動物は単に Theme 役を担っているに過ぎない。She drove to New York. → Captain Mars drove her to New York. の自他交替も、同じタイプである。

#### 4.3. リンキングの規則性

本稿は、伝統的な Agent を Vol-Initiator と Effector に分解した。Agent 項は、一般に主語位置とリンクすることが知られている。したがって、Vol-Initiator と Effector も、必然的に主語位置とリンクすると仮定する。(2)の使役動詞文が不適格なのは、(Vol-Initiator は主語位置に生起しているが) Effector が目的語位置に実現されているため、リンキング規則の違反があると説明される。一方、経路表現が加わると使役文が適格となるのは、Effector 項が同時に担う Theme 役のリンキング特性により、この項の目的語位置とのリンキングが可能になった、と考えられる。

(3) The general (= Vol-Initiator) marched the soldiers (= Effector/Theme) to the tents.

このような二つの再帰関係の脱再帰化は、stop にみられる操作的使役と指図的な使役 (Shibatani (1975)) を説明する。例えば *I stopped in the street.* の stop は自分の身体を制止するという意味で再帰動詞である (e.g., *Before I could stop myself, I started slipping down the slope to the stream.* 『英和活用大辞典』)。よって、意志行為のレベルも含めてこの LCS を表示すると、(3) となる。

(3) [ x DO AN ACT OF VOL ] INITIATE [ x STOP x ]

ここに含まれている二つの再帰関係を脱再帰化したものが、(33a, b) で、いずれも *I stopped the man in the street.* という文として実現される。

(3) a. [ x DO AN ACT OF VOL ] INITIATE [ y STOP y ]——指図的

b. [ x DO AN ACT OF VOL ] INITIATE [ x STOP y ]——操作的

(33a)が使役動詞 stopの指図的解釈を、(33b)が操作的解釈を説明する。

以上本章は、勧誘行為交替が、Levin and Rappaort Hovav (1995) のいう使役化によるものでなく、意志行為も含めた再帰構造に適用する脱再帰化により説明されると主張した。

## 第5章 描写句 (depictives) の意味論

本章では、(34a, b) の描写句 (斜字部) の意味論を提示し、それらの出沒を語彙意味論から説明する。

(34) a. John ate the meat *raw*.——目的語指向の描写句

b. John ate the meat *nude*.——主語指向の描写句

### 5.1. 描写句と主述関係

従来、描写句は、同節中の NP との間で主述関係を結ぶものとされ、その分布は、被叙述 NP との間で c 統御関係により説明されてきた。しかしながら、単純な c 統御条件だけでは説明できない描写句の存在や、目的語指向の描写句の動詞間での出沒可能性の相違、本来叙述的には用いれない AP が描写句としては許されるなど、描写句には主述関係・構造的条件だけでは説明しきれない面が存在する。本稿の主張は、描写句は、出来事成立に付随する様相を表す副詞的語句であるとするものである。例えば、(34b)は、John が、裸の状態という有様で肉を食べるという出来事が成立したことを述べている。したがって、描写句の主要部は典型的にステージレベルの形容詞が選ばれる (35)、連動して、この描写句により修飾を受ける主節出来事もステージレベルの陳述となる (36)。また、描写句の副詞的性質を示す証拠として、(37)があげられる。



ここでは描写句を問うのに、述部を問う *what* ではなく (e.g., A: *What/\*How was the mayor?* B: *He was vulgar.*), 典型的な副詞的語句に用いられる *how* が充てられる。

- (35) a. Ayala bought the dog *hot/\*intelligent*.  
b. \*Ayala cut the bread *hot/\*white*.  
(36) a. \*Noa knew the answers *awake*.  
b. \*John resembles his brother *happy*.  
(37) A: *How/\*What* did John eat the meat? B: He ate it *raw*.

また、door-to-door (a door-to-door salesman), Irish (Irish coffee) などの限定用法に限られる形容詞でも、出来事成立の具体的様 (さま) を表すことができれば、適切に描写句になれる。

- (38) a. The salesman visited all the houses in this town *door-to-door*.  
b. I drink my coffee *Irish*.

(38a) で描写句は、*the salesman* の訪問の様態を、(38b) では、コーヒーが飲まれる際の飲まれ方を表しており、いずれも出来事の修飾語句として働いている。

## 5.2. 目的語指向描写句の出没の限定性

Rapoport (1993) によれば、主語指向描写句に対して、目的語指向描写句は、その出没が、使役動詞文に限定されるという。

- (39) a. ?\*I kicked John *depressed*.  
b. ?\*John met the mayor *naked*.  
c. ?\*Mary praised the professor *drunk*.

この記述は、本稿の主張から自然に帰結する。(39)の動詞には、目的語が関わる下位出来事がなく、描写句に、言及すべき肝心の修飾対象が欠けているからである。一方、*Tom cut the bread hot* のような使役動詞文では、*the bread* を起点とする下位出来事 (= 'the bread gets separated') があり、*hot* は適切に、この出来事が成立する様を表すことができる。一方、(39)で、描写句が主語指向であればいずれも適格となるが、これは、主語を起点とする出来事が常に成立しているからである。さらに本稿の理論では、使役動詞以外でも、目的語を主参与者とする下位出来事が成立していれば、それを指向する描写句が可能であると予測される。例えば *John<sub>i</sub> ate the meat<sub>j</sub> raw<sub>j</sub> naked<sub>j</sub>* で、消費動詞の *eat* は使役分析を受けないが、主語指向に加えて、目的語指向の描写句が可能である。Van Valin (1998) によれば、*eat* の概念構造は(40)のように、二つの下位出来事の等位と分析されている。

- (40) [ JOHN ATE MEAT ] & [ BECOME [ MEAT CONSUMED ] ]  
          ↑  ↑  
          naked  raw

すなわち、*the meat* は、*John* の行為の対象に加えて、それに並行して減少していく変化体 (Incremental Theme; Dowty (1991)) でもある。描写句 *naked, raw* は、(40)のこれらの出来事を適切に修飾している。このように、描写句が出来事の副詞的修飾語句であるとする、主語についても、もしそれを起点とする出来事が成立していないときには、主語指向の描写句は排除されることになるかと予測される。これは正しい。

- (41) a. ?\*John received the letter *angry*.  
b. John received the manuscript *unfinished*.

(41a) で、*the letter* を起点とする出来事 (*the letter* の移動) はあるが、*John* の出来事はない。一

方、目的語指向の描写句は予測通り許される (41b)。

以上本章は、描写句が主述関係を捉えるものではなく、出来事の生起に付随するその様相を表す副詞的修飾語句であるとする意味論を仮定し、これにより描写句の出没の可能性を明らかにした。

## 第6章 Spray/load 動詞の語彙意味論と場所格交替 (Locative Alternation)

本章では、*spray/load* 動詞にみられる、いわゆる場所格交替(42)を、このクラスの使役動詞に共通にみられる意味構造から説明しようとするものである。

- (42) a. Bill loaded cartons onto the truck./Bill loaded the truck with cartons.  
b. Jack sprayed paint on the wall./Jack sprayed the wall with paint.

標準的な説明では、語彙規則により、*onto* 用法 (LCS<sub>ONTO</sub>) から *with* 用法 (LCS<sub>WITH</sub>) を導く方法が提案されてきた (Rappaport and Levin (1988), Kageyama (1988) など)。本稿は、それぞれ独立した両用法に、たまたま同一の名前が付与されたことから交替効果が生じたものと仮定する。

### 6.1. 使役動詞の基本語彙鑄型と Locatum 動詞

本稿第1章で、語彙的使役動詞について、以下の基本鑄型を提案した。

- (43) a. [x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y AT-PLACE]]  
b. [x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y STATE]]

(43a)の LCS は、*put* などの場所格動詞の語彙意味を捉える。(43b)の LCS は、状態変化動詞一般の語彙意味を捉える。この中には、*butter* などの、Locatum (=placeables) 名詞に由来する Locatum 動詞も含まれる。

- (44) [x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y <BUTTER-ED>]]

すなわち、本稿は、(43b) の鑄型の y 項の STATE について、<NOT-ALIVE> や <DRY> など、y 項だけに言及するものばかりでなく、y 項外の材料・媒体によって画定されるものもあるとする。そして、この型の LCS を導く典型的具現規則 (cf. Rappaport Hovav and Levin (1998)) (45)を仮定する。

- (45) Locatum → [x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y <LOCATUM-ED>]]

(44)について、編入を受け「一定の状態」を定義する BUTTER をさらに具体的に指定するため、*with* 句が随意的に実現されることがある (e.g., *We buttered the bread with cheap margarine.*)。本稿は、このような *with* 句を、統語的には項の実現形というより、編入されている定項を修飾する付加詞とみなす。

さて *spray/load* 動詞の *with* 用法であるが、本稿は、(45)の分析を採用する。すなわち、例えば *load<sub>WITH</sub>* は、Locatum 名詞 *load<sub>N</sub>* が編入された [x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y <LOAD-ED>]] により特徴づけられる、と仮定する。

### 6.2. 交替効果と本理論の帰結

*Spray/load* 動詞には、一つには *put* 類動詞としての用法 (LCS<sub>ONTO</sub>) がある。同時にこれらには、同名の Locatum 名詞 ("placeables" を表す) が存在する (e.g., *load, spray, cram, smear, slather, splash, stuff, ...*)。これらの名詞に対して(45)が適用して、LCS<sub>WITH</sub> が導かれる。こうして得られる同名の二つの LCS が交替効果をもたらすのである。

このように *with* 用法を、(45)から導くと、*spray/load* 類に一般に Locatum 名詞が存在するという

事実が帰結する。一方、*pour* 類の動詞、*put* 類の動詞には、"placeables" を表す Locatum 名詞は存在しないので、これらに *with* 異形が存在しないことが帰結する。もう一つの帰結として、*with* 句の随意性がある(e.g., *He loaded the truck (with hay).*; *John smeared the banana with mustard.*)。これは、*with* 句が、これらの LCS に組み込まれている定項 (= 状態: LOAD-ED, SMEAR-ED) を修飾する付加詞であることから説明される。他方、語彙編入を受けた Locatum が *butter* などとは異なり、意味的に不定である場合には、その意味を指定する *with* 句の出役が必要とされることが予測される。例えば、*plaster<sub>N</sub>* は "some adhesive material" という変項的意味をもつが、ここから派生した *plaster<sub>WITH</sub>* は、*with* 句を義務的に必要とする。

(46) She plastered her face \*(with cold cream).; He plastered the wall \*(with slogans).

さらに、本理論では、本来状態変化動詞で *put* 用法をもたない *fill*, *saturate*, *clog*, *cover* などの動詞には使役交替がみられないことが帰結する。これらは、基本的に、(43b) の LCS で特徴づけられる動詞だからである。

以上本章は、場所格交替が、二つの独立した LCS (LCS<sub>ONTO</sub>, LCS<sub>WITH</sub>) により説明されるとした。LCS<sub>ONTO</sub> は、*put* 類の動詞を特徴づけるもので、このような動詞 (の一部) に Locatum を表す同名の結果名詞がみられる (e.g., *load<sub>V</sub>—load<sub>N</sub>*)。Spray/load 動詞の LCS<sub>WITH</sub> は、Locatum 名詞の語彙編入とい独立した規則から導かれたもの、とするのが本稿の主張で、ここから場所格交替に観察される種々の事実が帰結することをみた。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、語彙意味論の立場から、英語の使役動詞に関わる諸問題について論じ、語彙意味と動詞の交替形の相関関係、語彙意味と統語論のインターフェイスについて独自の提案をし、語彙意味論の進展に寄与することを目的としている。使役動詞に関して、特に語彙的使役動詞に関わる 5 つの統語現象—心理動詞に見られる T/SM 制限、使役起動交替、勧誘行為交替、描写句の分布、場所格交替を取り上げている。語彙意味の考え方には、意味構造を意味役割のセットとして捉える方法と語彙概念構造によって表示する方法があるが、本論では語彙概念構造の枠組みに立ち、それをさらに精緻化した精密意味論の立場を主張する。

本論は、6 章から成り立っている。序章は、生成意味論から語彙意味論に至る意味論の簡潔な研究史展望である。第 1 章では、使役動詞を分析的使役動詞、語彙的使役動詞、形態的使役動詞の 3 つに分類し、中心課題である語彙的使役動詞の意味的特徴を、使役の直接性 (使役の原因となる使役出来事とその結果の間に見られる出来事の単一的把握) と一連の継起的関係の 2 点であると指摘する。そして、この特徴に基づいて、語彙的使役動詞の基本的意味構造として、結果出来事を BECOME で定義する意味構造と BE で定義する意味構造の 2 つを提案する。

第 2 章は、心理動詞についての考察である。心理動詞は従来特異な振る舞いをする動詞であるとみなされ、特別な説明が必要であると考えられてきた。本論では、この見方が誤りであることを指摘し、心理動詞も第 1 章で指摘した使役動詞の基本意味構造に合致するものであり、心理動詞に特有の意味構造は不必要であることを説得的議論で論証している。Pesetsky (1987, 1990, 1996) は経験者を目的語にとる心理動詞に対して、意味構造を意味役割のセットであるとする意味論の立場から、これらの動詞は意味構造[Causer, Causee, Target / Subject Matter]を

持つとしているが、これに対して、特にこれらの動詞がTarget/Subject Matterの意味役割を持つと仮定することは誤りであると主張する。そして、使役動詞は、意味的に使役主、被使役者、結果の3項をもつので、経験者を目的語にもつfrighten, surpriseなどの心理動詞も、使役動詞の下位類をなすもので、必然的に一般的な使役動詞の意味鑄型に従うと主張する。これらの心理動詞は、ある作用因子が被使役者に心的影響を及ぼし、特定の心的状態（結果）へと導くという意味を表す。したがって、結果状態が心的であるという点を除けば、これらの心理動詞も、一般の状態変化動詞と同じ意味構造をもっている。したがって、心理動詞に特有の意味構造を設定する必要はない。本論のこの主張は、従来一般的に認められていた通説の妥当性を根本的に問い直すものである。

第3章は、本論文の中心を成す章であり、独創的な提案が随所に盛り込まれている。本章では、まず第1に、語彙的使役動詞の表す使役は、同延的なものとオンセット的なものの二つがあると主張する。オンセット使役とは、使役主が被使役体に一定の刺激を与え、その刺激により、被使役体がそれ以後自立的に独自の振る舞いを実現していくものをいう。一方、同延使役とは、使役主の作用が絶えず被使役体に及び、被使役体側で実現される自立的運動あるいは行ないないものをいう。したがって、同延的使役動詞では、結果出来事の原因を被使役体側が負っているため、同延使役の出来事には、被使役体が行う独立した下位出来事は含まれていない。一方、オンセット使役動詞では、結果出来事に自立性・独立性が備わっており、使役主はその活性化に責任をもつだけである。第2に、このような区別に立って使役起動動詞の交替現象を説明する。本論の使役交替の説明は、Effectorによる自己達成的な振る舞いを表す自動詞的語彙概念構造と、この語彙概念構造に始動的な外的作因（INITIATE部）が付加されて得られる二つの語彙概念構造が交替効果を生み出す、とするものである。換言すれば、使役起動交替は、自立タイプの自動詞的出来事を表す意味構造に始動出来事を表す意味構造が随意的に付加することによって説明される。この操作によって得られる他動詞の語彙概念構造は、典型的なオンセット使役の意味構造をなす。第3に、自発的出来事を表す自動詞に他動詞の交替形が見られないのは、これらの自動詞はもともと始動因子を内在しているため、それ以上始動出来事を表す意味要素（INITIATE部）の付加が許されないことに起因すると説明する。第4に、同様の説明がhangなどの空間形態動詞にも当てはまると論じている。第5に、mount類の動詞やlodge類の動詞に見られる交替は、使役起動交替とは異なり、再帰動詞に適用される脱再帰化規則によるものであると主張する。このように、従来とは異なる独創的な視点から使役交替現象を論じている。

第4章では、walkやjumpなどの運動様態を示す非能格動詞の他動詞化について論じている。この交替現象は、従来、本来自動詞の使役化として分析されていたが、実は逆の操作が適用されていると主張する。すなわち、自動詞用法は、本来再起的である他動詞の目的語が語彙概念構造において動詞の中に意味上繰り込まれた結果自動詞用法が得られ、他動使用法が基本であるという考え方である。すなわち、これらの動詞に見られる交替は、再帰関係を含む自己使役的な他動詞が目的語の繰り込みによって自動詞用法を持つように見えているに過ぎないということである。これは極めて独創的で示唆に富む分析である。

第5章では、描写句（depictives）と主述関係について論じている。従来、描写句は、同一節中のNPとの間で主述関係を結ぶものとされ、その分布は、主部となるNPが描写句をc統御する関係にある場合に成り立つと説明されていた。しかしながら、描写句には単純なC統御条件に

よる構造的条件だけでは説明しきれないものが存在する。本論では、描写句を出来事成立に付随する様相を表す副詞的語句であると分析する。この分析によれば、描写句は、主語NPあるいは目的語NPを叙述する述語ではなく、行為ないしは移動・状態変化を修飾する副詞的語句である。この仮説によれば、描写句の目的語指向性あるいは主語指向性は、描写句が目的語ないしは主語が主参与者となっている出来事を副詞的に修飾していることから生ずる。一般に、目的語指向の描写句の生起が、主語指向のそれに比べて厳しく制限されるのは、前者については、当該動詞がその主語による行為などの出来事に加えて、目的語を起点とする独立した下位出来事を含まなければならないことによる。従来、描写句は形容詞とみなされてきたが、それを根本的に覆す論考である。

第6章では、場所格交替について論じている。spray/Load動詞に見られる場所格交替の現象は、標準的な説明では、語彙規則により、onto用法からwith用法を導く方法によって説明されてきた。これに対して、本論では、この交替は見せかけの交替であって実際には存在せず、それぞれ独立した両用法にたまたま同一の音形の動詞が対応した結果に過ぎないと論じている。すなわち、場所格交替は、単純移動を表すput類の用法とLocatum（場所）を表す名詞から派生した状態変化動詞が同音異義であることにより、交替現象が起こっているように見えるに過ぎないと主張する。

本論は、述語の意味とその統語的特性の間に密接な相関関係を仮定する語彙意味論の観点から、広範囲にわたる語彙的使役動詞の意味を明らかにし、それに基づいて、それらの動詞の統語上の特徴を明らかにすることを試みたものである。通説の問題点を鋭く指摘し、それらの問題点を克服するために、より広範な説明力を持つ独自の分析を果敢に提示している。これらの分析には、語彙意味論の新しい展開を生む基礎となるものもあろうし、批判的検討を受け、それによって更なる議論を生み出すようになるものもあるであろう。いずれにせよ、本論は、語彙意味論の展開に一石を投じ、その波紋は意味論研究の諸分野に及ぶことが期待される。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。